看板物語

長野県松本市

田立屋……金工職人が手掛けたもの

小林一成 | Kazunari Kobayashi
松本市建設部都市政策課都市デザイン担当

かつては上級武家地であった「大名町」。松本城三の丸の大名小路は時代と共に変容し、今は商店やオフィスが立ち並び、お城へ向かう観光客が行き交っている。その通りの一角に、控えめながらも存在感のある看板は、松本民芸の発展に貢献した金工職人の手掛けたものだった。

1

2

3

田立屋（ただちや）は、かつての松本城大手門桝形と大名屋敷の南側一部に位置する。昭和48（1973）年に大名町通りの拡幅に合わせて店舗を建て替え、平成23（2011）年に南側に隣接するビルが解体されたため、角地の立地となった。店舗にはこだわりを感じるモダンな看板が掲げられ、敷地の南西角に配置された街路灯看板には常に明かりが灯され、一見、公共の街灯かと思うほどに町並みと馴染んでいる。

店は主に化粧品を扱い、ショーウインドウにはその関係を始め、店の歴史にまつわる展示が行われている光景を目にする。開放性の高い建物からは店内の雰囲気が外へ滲み出ており、店の前でも品の良いであろう様子がうかがえるが、真鍮の取っ手の赤い扉を開けて店内へ入ると、外からではわからなかった華やかな香りと共に、田立屋のもう一つの「看板」であるお店の方々が迎えてくれる。

私がお城周辺のまちづくりにかかわるなか、大変お世話になっている株式会社田立屋の六代目代表取締役の大宮康彦さんに看板にまつわる話を伺った。

創業が嘉永元（1848）年になる「田立屋」は、木曽の田立村から出てきたことに由来し、屋号は「〇徳」（マルトク）という。由来は、初代大宮徳重の「徳」を使ったのか、人の生きる意味で重要な想いを持っていることからか、はっきりしないようだ。

大宮康彦さんの父である五代目大宮幸夫氏と、松本民芸の発展に貢献した金工職人の飯野歌之助氏は懇意な間柄で、当時、店へ看板のデザイン案を持ってきて、提案を受けたことがきっかけで看板制作が始まった。

「大名町とは言うけれど、日本調の和の雰囲気は合わないので、ヨーロッパ調で」という先代の要望に応えた飯野氏が設計した看板は、新店舗建設後のやり取りであったため、店の佇まいに合わせたデザインになったのだ。当時の大名町では道路拡幅に伴い、店舗は装いを改め近代的な町並みが形成されつつあった。店舗建設から5、6年後の昭和53、54年にこだわりの金工看板が誕生する。

「飯野氏はおしゃれな人で、店でネクタイなどのブランド品を扱っていた頃、その締め方や合わせ方に気を使う人であったし、そういう知識がある人だった。あの頃にしては時代の感覚を先駆けた人で、単に工夫もなく物をつくるという人ではなかった」と大宮さんは言う。

街路灯看板は、お店の営業時間中は点灯している。当時は白熱電球の柔らかい光で、一時、白色のものを使用していたこともあったが、今は暖かみのある光が見直され、色温度の低い落ち着いた照明に変更されている。

玄関上部の箱文字看板にも、店舗に合わせた提案が飯野氏からあったようだ。歩道から見上げて程よいサイズのそれは、歩行者から見やすい控えめな大きさでという配慮があったのだろうか。わずかに傾斜が付けられており、さらには玄関上部の白いフレームから細い2本の足により、一文字一文字が支えらえている。看板という機能だけでなくお店の持っている、品質へのこだわりや仕事の丁寧さが感じとれる、一つの「作品」だ。

「田立屋」の文字に特定のフォントはないというが、昔の写真を照らし合わせてみると字体が継承されており、飯野氏が制作した看板にもそれが踏襲され、代々引き継がれていることに伝統の重みを感じる。

「今年で170年になる日本で最も歴史のある化粧品専門店。今までの商いの考え方、社是である〈誠〉という誠実な商いに徹していく気持ちで、これからも地域の女性を美しくする仕事を続けていきたい」と大宮康彦さんは語る。

小林一成（こばやし・かずなり）

主に中心市街地のまちづくりにかかわっており、現在は松本市都市政策課都市デザイン担当に所属。2013年より中央公民館主催の景観講座にかかわり、2016年から裏町看板学講座として、建築士の長谷川繁幸氏や都市計画家の倉澤聡氏、イラストレーターの高田美果氏、参加者と共に「看板採集」を行い、身近な看板から街の景観を語りあっている。今年度から松本看板学会に改め、幅広く活動を始めている。

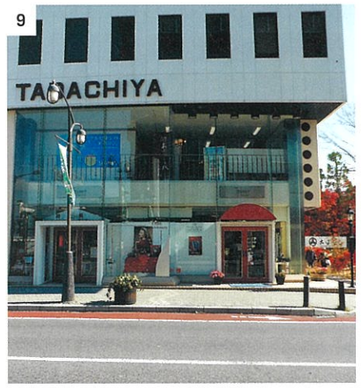
4

5

6

7

8

9


10

11

1. 店舗入口の箱文字看板。金工職人・飯野歌之助氏の作品。箱文字を支えている二本の細い支柱の造形が美しい。
2. 街路灯看板。こちらも金工職人・飯野歌之助氏の作品。4面に「田立屋」の文字。金属ならではの質感が表現されている。
3. 街路灯看板は、店舗敷地の角に設置されている。
4. 昭和5（1930）年。「化粧品と髪飾品」と書かれた大きな壁面看板と袖看板。「資生堂石鹸」ののぼり旗が付いている。
5. 昭和11（1936）年。「資生堂チエインストア 田立屋」。袖看板が新調される。田立屋の字体が変わっている。
6. 昭和26（1951）年。さらに大きな壁面看板となり、看板建築的なファサードに変わる。「美容の店 田立屋」の文字。
7. 昭和35（1960）年。屋上にネオン看板が追加される。「HAPPY NEW YEAR」のレイアウトに惹かれる。
8. 昭和48（1973）年頃の店舗入口部分。
9. 平成30（2018）年。現在の店舗。南側の建物は広場へ変わったため、角地の立地になった。店舗入口部分の丸い袖看板は撤去されている。
10. 六代目・大宮康彦さん。店舗2階には「資料館」が設置されている。
11. 資料館には、当時の看板や化粧品にまつわる貴重な資料が展示されている。